

日本の体育教師教育研究における 研究方法に関する一考察

— 研究アプローチとリサーチクエスションの関係性を手掛かりに —

前田 一 篤
(2019年10月3日受理)

Research Methods in Physical Education Teacher Education Research in Japan:
The Relationship between Research Approaches and Questions

Kazuma Maeda

Abstract: Research approaches and questions (RQs) for physical education teacher education research were organized to obtain basic materials for the future development of physical education teacher research in Japan. Furthermore, the possibility of mixed-method research (MMR) is examined from the perspective of research methods in the same field. The results show many previous studies where (1) RQs are not clearly shown as a problem of research methods in physical education teacher education research in Japan and (2) there is a problem in the methods of research design of MMR that compensate for the shortcomings of qualitative and quantitative approaches. Therefore, the further development of MMR, which emphasizes the research design based on RQs, is important for Japan's physical education teacher research, where there are challenges in clearly describing the sequence of "RQ-research objective-research method."

Key words: Physical Education Teacher Education, Teacher Training, Mixed Methods
Research

キーワード：体育教師教育，教員養成，混合研究法

1. 研究の背景

近年、日本において「学び続ける教師像」の確立が叫ばれ、教育を担う教師がその力量を持続的に向上させることが求められている（中央教育審議会，2012）。また、体育科教育の領域がその使命を果たし社会に貢献するためには、良い体育授業と専門的力量的の高い体育教師が必要であるという指摘がされている（友添，

2015）。さらに、松田（2015）は「教員養成で教える内容が未だ30年、40年前の知見と変わっていない」部分があると指摘し、養成段階での学習が教育現場に活かされていない問題を提起している。この問題を解決するためにも、日本の体育科教育を充実させる方途として、体育教師教育研究の深化が重要であると考えられる。

他方、国際的に見ると、研究方法についての議論は研究領域を問わず広くなされてきた。とりわけ、量的・質的などといった、研究アプローチについての議論が盛んにされている（例えば、抱井，2015；クレスウェル，2010；Lincoln & Guba，2000；Tashakkori & Teddle，1998）。

量的研究と質的研究の関係については、かつてから

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：齊藤一彦（主任指導教員），出口達也，
木原成一郎，岩田昌太郎

対立的に議論がなされてきた。しかし、1940年代の前半からなされてきた量的研究と質的研究におけるパラダイム論争に対し、双方の研究方法は対立するものではないという指摘がされるようになった（クレスウェル, 2010）。そして、1990年代に入ってから、量的調査と質的調査の両方を取り入れた研究方法であり、双方の長所を活かし短所を補うことで研究の妥当性及び信頼性を高めるものとして「MMR (Mixed Methods Research) : 混合研究法」(以下, MMR) が確立され始めた（抱井, 2015 ; 広瀬, 2012）。近年, 上記の3つの研究アプローチにおける哲学的前提の整理や, 研究課題・調査方法などといった研究デザインの設定の仕方などについての議論が多くなされ, 新規的な研究方法論を模索する傾向が現れてきている。

上記のような流れを踏まえて, 国内外で体育教師教育における研究方法論についての議論がなされている（Carrie et al., 2008 ; Jesse L. et al., 2016 ; 高橋ら, 1994 ; 大友ほか, 2002 ; 岩田, 2010 ; 四方田ほか, 2015など）。

例えば, Carrie et al. (2008) は, 論文検索エンジン（「ERIC」, 「EBSCO」, 「ISI Web Knowledge」, 「SPORT Discuss」）を用いて, 1990年から2008年の間に発表された体育教師教育に関連する英語論文の研究手法について検討している。その中で, 分析対象とした学術論文に採用されている研究アプローチについては, 大部分が質的アプローチを採用しており, 次いで混合アプローチ, 量的アプローチが採用されていたと述べている。さらに, Jesse L. et al. (2016) は, 過去30年に英文学術誌「Journal of Teaching in Physical Education」(以下, 「JTPE」) に掲載された文献をレビューしている。とりわけ, i. 教育実践者に焦点を当てた研究は発行当初から継続的に取り上げられていること, ii. 教授技術に関するテーマは減少していること, iii. カリキュラムに関する研究が近年増加傾向にあることを示した（Jesse L. et al., 2016）。しかし, 両者とも, 各年代における研究方法の推移や傾向については触れられておらず, 論文の形式とそれまでのリサーチクエストション（以下, RQ）の傾向を確認するにとどまっている。

一方, 日本国内においては, 岩田 (2010) が, 体育科教育に関する啓蒙誌及び学会誌に1999年から2009年の間で掲載された特集や演題のテーマを整理し, 同分野における研究動向について調査した。そこから, 領域別の方法論, 体育科の本質・目的, 学習者論, 教師教育, 評価論の5つが多く取り上げられていることが示された。さらに, かつて主流であった学習者論は近年減少傾向にあり, 教師教育についての研究が台頭し

たことを指摘した（岩田, 2010）。しかし, 各領域の研究においてどのようなアプローチから研究がなされているかの方法論については言及されていない。

他方, 日本国内においては, 諸外国における先行研究の方法論に焦点を当てた研究も見られる。大友ほか (2002) や四方田ほか (2015) は, JTPE に掲載された体育授業研究や体育教師教育に関わる論文をレビューした。その結果から, 両者ともに, 米国における研究は, 豊富かつ多様なデータの収集及び分析の方法をとっていることや, 妥当性・信頼性を高める手続きが明確であるという点が日本における研究との大きな相違であるという課題を指摘している。さらに, 理論的枠組みを探究することが必要であると述べられている。

しかし, これらは諸外国における研究成果に関する知見であり, 日本国内における研究論文については十分に検討されていない。さらには, RQ と研究アプローチとの関連性についても言及されていない。

RQ について, 先行研究をもとに取り組みべき RQ を特定することで, 研究目的や研究方法が絞り込まれる（クレスウェル, 2017）ことから, 最近になってその重要性について再確認されている。Chapman & Sonnenberg (2003) は, RQ には, 《どうなっているか》を問う記述的問いと《どうすれば良いか》を問う処方的問いがあるとしている。そして, それぞれの問いから始まり, 研究の一連の流れから知見と理論が得られるとされている（Michel & Hambrick, 2010 ; Chen, 1990）。このことから, RQ 起点とした研究デザインが, その研究の方法論の選択や理論の確立に向けた要となることが考えられる。

以上のように, 先行研究を概観すると, 近年の体育教師教育における方法論の国際的な流れや日本における同分野の課題について確認することができる。その一方で, 日本国内における体育教師教育に関する研究の方法論について整理した先行研究は管見の限り見当たらない。さらに, 今後の日本における体育教師教育研究の方法論の方向性を検討するためには, RQ や研究アプローチの動向を個別に見るのではなく, 関連性を持って検証することも肝要であると考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究では, 今後の日本における体育教師教育研究の発展に向けた基礎資料を得るために, 日本の体育教師教育研究における RQ と研究アプローチとの関係性について概観し, 研究デザインにおける課題に関する示唆を得ることを目的とする。なお, 調査対象とする先行研究は, 英文学術誌に掲載された体育教師

教育研究に関する先行研究の方法論について言及している大友ら（2002）や四方田ら（2015）と比較することも視野に入れ、2002年から2016年のものとする。

3. 研究方法

3.1. 資料の収集

文献の収集については、「CiNii Articles」に掲載されている学術論文の中から、キーワードと検索から文献の収集にあたった。キーワードの選定については、先述した英語論文における体育教師教育研究のレビューを行った先行研究（Carrie et al., 2008；四方田ほか, 2015）に「Physical Education」と共に「Teacher Education」というキーワードが共通して挙げられていた。そのため、体育教師教育を専門とする大学教員と協議した結果、これら単語の翻訳として日本の文脈においては、「教師教育」及び「教員養成」が妥当であるという結論に至ったため、「体育 教員養成」及び「体育 教師教育」をキーワードとして検索し、文献を抽出することとした。その検索結果として適合した426編の文献から重複した38編を除外した388編をベースとした。このうち、下記の選定基準によって限定した78編を調査対象とした。各選定基準における結果と経緯は以下の通りである。

- 1) 学会誌や紀要等に掲載されている学術論文である（209編：全体比53.9%）
- 2) 日本の体育教師教育に関連する内容の文献である（113編：全体比29.1%）
- 3) 本文に研究方法が明記されている（78編：20.1%）

以上の手続きを経て得られた論文について、以下の観点から分類した。

- ①研究アプローチの年代別推移（表1）
- ②RQの年代別推移（表2）
- ③RQと研究アプローチの対応（表3）

3.2. 分析の方法

分析対象とした先行研究における研究方法の動向について検討するために、RQと研究アプローチとの関連から検討した。分析に際して、各先行研究におけるRQの内容を帰納的に分類してカテゴリーを生成した。さらに、生成したカテゴリーをその対象の性質から、教員養成に関する内容の「養成」、現職教員に関する内容の「現職」、及び「その他」に分類して集計した（表1参照）。(2)における分析においては、(1)で生成したRQのカテゴリーごとに採用されている研究アプローチについて整理し、日本の体育教師教育研究におけるRQと研究アプローチとの関連について検

討した。分類作業は3度実施し、そのうち1度でも一致しなかった内容については完全に一致するまで繰り返し分類を行った。また、分類された結果について体育教師教育を専門とする大学教員と協議し、仲間同士の検証を行った。なお、統計処理については、R(version 3.6.0)を用いてFisherの正確確率検定を行った。

3.3. 各研究アプローチにおける先行研究の概観

日本の体育教師教育研究における研究方法論の課題を検討するために、各研究アプローチから先行研究を事例的に概観する。そこから示唆される課題について検討し、日本の体育教師教育研究における方法論の方向性について考察する。

4. 結果と考察

4.1. RQと研究アプローチとの関連

RQと研究アプローチの関連について、表1にまとめた。表1から、全体の合計数から、日本の体育教師教育研究における約半数で質的アプローチが採用されていることが見て取れる。

RQカテゴリーを見てみると、量的アプローチについては、RQカテゴリーにおける「知識の形成」や「授

表1 日本の体育教師教育研究におけるRQと研究アプローチの関連

大カテゴリー	小カテゴリー	研究アプローチ	
養成 (50)	知識の形成(13) (教科に関する知識や指導法に関する知識について)	量的(1) 質的(0) 混合(2)	量的 (18)
	信念(観)の検討(4) (体育授業に関する学生の考え方やイメージについて)	量的(2) 質的(2) 混合(0)	
	リフレクション(省察)能力の検討(4) (学生が経験した実践について振り返る力について)	量的(1) 質的(3) 混合(0)	
	授業観察の観点の変容(5) (他者の実践を観察する観点の変容について)	量的(1) 質的(1) 混合(1)	質的 (26)
	授業プログラムの改善・開発(13) (大学における授業の内容や指導法について)	量的(4) 質的(6) 混合(3)	
	教員養成カリキュラムの改善・開発(16) (教員養成カリキュラムの構成や効果について)	量的(4) 質的(8) 混合(3)	混合 (10)
	模擬授業の効果の検討(7) (模擬授業の実践を通じた学生の受容について)	量的(1) 質的(5) 混合(1)	
	教育実習の効果の検討(1) (教育実習を通じた学生の受容について)	量的(0) 質的(1) 混合(0)	質的 (29)
教師の職能向上(8) (授業改善や指導力の向上について)	量的(1) 質的(2) 混合(4)		
現職 (8)	保健教育の改善(1) (保健授業の改善について)	量的(1) 質的(0) 混合(0)	質的 (2)
	教科体育・教師のイメージ(1) (体育授業や体育教師に対するイメージについて)	量的(1) 質的(0) 混合(0)	
その他 (19)	教師教育における課題の検討(2) (体育科教師教育の研究内容や方法の課題について)	量的(1) 質的(1) 混合(0)	混合 (14)
	RQ不明確(16)		

業プログラムの改善・開発」, 「教員養成カリキュラムの改善・開発」など, 学生の変容の結果や, 授業実践の結果を確認するというように, 変容の結果や介入の成果を検証する際に採用されることが多いことが見て取れる。また, 質的アプローチは, 「リフレクション(省察)能力の検討」や「模擬授業の効果の検討」など, 教育の効果や対象者の能力の変容, 及びその要因に関して, もたらされている結果の背景を検証する際に採用されていることがうかがえる。さらに, 混合アプローチについては, 量的アプローチと質的アプローチの2つの側面を併せ持っており, 知識の変容過程とその結果を確認したり, 教育のプロセスとその成果を確認したりするときに用いられていた。そのため, 先述した近年の多くなされている「授業プログラムの改善・開発」と「教員養成カリキュラムの改善・開発」や, 「知識の形成」については, 混合アプローチを含めた3つのアプローチが広く採用されていることがうかがえる。これは, 研究結果を量的に示すことでその成果を具体的に把握すること, その成果の原因やそこに至るまでのプロセスといった内実について検証することが必要なRQであるため, 質的アプローチと量的アプローチの単一の視点のみならず, 混合アプローチから検証されていると考えられる。

表1によると, 特筆すべきは, 論文内にRQが明確に示されていない「RQ不明確」の件数が多いことである。RQとは, 研究の道筋を示すものであり, 調べたい対象の明らかとなっていないの部分に関係するもの(タシャコリ, 2017)であると同時に研究の目的を具体的にわかりやすく伝える作業(新田, 2015)である。したがって, RQは, 1つの研究に着手するにあたっての問いであり, それは研究目的の確定に先立つことで研究の意義を明確に表すことができ, そうすることでおのずと最適な研究方法の選択につながっていくことになる。つまり, RQは研究の方法論における起点であり, RQと研究目的, および研究方法の一連の流れを理論化する方法論的アプローチ(Clerf et al., 2001)において無くてはならない作業なのである。しかし, 今回調査対象とした学術論文の2割近くにおいて, RQを読み取ることができなかった。このことが目的の明確化や適当な研究方法の選択における課題であり, 日本の体育教師教育研究の方法論や理論的枠組みの確立が不十分と指摘される一因であると推察される。

以上のことから, 日本の体育教師教育研究の動向として, 以下の点が示唆された。

- ・近年, 教員養成における教授方法や養成カリキュラムに関する研究, ならびに学生の実践的指導力

向上を意図したRQを設定した研究が多くなされていた。また, 現職教育に関するRQは全体比としては少ないが, 近年多く実施されるようになった傾向がうかがえる。

- ・研究アプローチの選択においては, RQのカテゴリーにより一定の傾向を見ることはできなかった。ただし, RQが不明確な研究が多いことがうかがえた。このことから, 今後はRQを明確にする研究デザインの方法を確立することで, 研究方法の選択を適切に行うことができ, 日本における同分野の研究的方法論がより発展していくと考えられる。

4.2. 各研究アプローチにおける先行研究の概観

ここでは, 調査対象とした先行研究の中から研究アプローチごとに無作為に抽出し, その内容について事例的に概観していく。そこから示唆される課題について検討し, 日本の体育教師教育研究における方法論の方向性について考察する。

4.2.1. 量的アプローチの特徴と課題

はじめに, 量的アプローチの先行研究について概観する。

藤田ほか(2011)は, 教員養成段階の学生が行った模擬授業の振り返りの記述数から, 省察の推移を明らかにすることを目的として検証した。分析にあたっては, 学生がリフレクションシートに記述した省察を, 吉崎(1987)の示した教師の知識領域を参考に分類をし, 教師役経験時と学習者役経験時, 及び教師役を経験する前後の学習者役経験時における平均記述数の違いをt検定によって比較した。その結果から, ①模擬授業における教師役の実践では, 学習者役の反応を踏まえた省察がなされていること。②教師役の実践によって, 学生の省察の視点が教師行動から批判的な教材・学習課題・教具へ転換されること。③学生が教師役を経験することで, 学習者役での省察が促進されることを指摘した。

他方, 長見ほか(2010)は, 日本の大学におけるより良い体育教員養成カリキュラムの構築を検討するために, 体育教員免許を取得できる高等教育機関で公開されているカリキュラムの実態(「教科に関する科目」と「教職に関する科目」)の中の教科の指導法に関連する科目の開設状況, 及び傾向)を明らかにしている。明らかとなった関連する授業数や単位数から, 日本における体育教員養成カリキュラムの基本構造は, 学問ベースから職能ベースに移行しつつあると述べている。そのうえで, 高等教育機関において学問性を保持することの重要性を指摘している。

そのような中, 長見ほか(2010)は, 体育教員養成

カリキュラムにおける授業内容についての詳細な分析を必要とすることや、カリキュラムについての理念性・国際的視野・教育現場との関わりなどについても包括的に検討していくことが求められることを今後の課題として挙げている。また、藤田ほか(2011)は、模擬授業の具体的な状況とどのように関連した省察がなされていたのかを検討するために、分析対象とした記述内容の質的分析の必要性を述べている。以上のことから、量的アプローチにおいては、ある事象の《結果的側面》を明らかにすることは可能であるが、その内実やそこに至るまでの経緯について言及することに限界があることがうかがえる。

4.2.2. 質的アプローチの特徴と課題

次に、質的アプローチの先行研究について概観する。

まず、木原ほか(2007)は、初等教員養成コースに在籍する学生を対象に、対象者が体育授業の模擬授業からどのような問題点を発見しているかを把握するとともに、教育実習前の模擬授業の意義について検証している。研究方法としては、模擬授業の反省会から得られた授業者の反省内容を、KJ法を用いて分析し、その内容を検証している。その結果、①教材や授業者の違いによらず、学生は模擬授業の計画・実践・反省の過程を通して共通の観察する視点を身に付けていること。②運動の難易度によって学生の気づきの特徴が表れていたことを指摘している。また、模擬授業の意義として、授業観察の視点を持たせるとともに、その視点に沿って問題に気づくことができることであると述べるとともに、それらの視点が教育実習においても同様であるかを検証する必要性があると述べている。

他方、坂本・中井(2011)は、日本におけるより良い体育教員養成の実現に向けたカリキュラムを検討するため、アメリカの体育教員養成カリキュラムの特徴について検証した。研究方法としては、アメリカの公的機関であるNASPE、及びINTASCが定めた2つの新任体育教師としての能力基準を参考にして、現地のプログラムへの参加、及びプログラムコーディネーターへのインタビュー調査から検証を行っている。その結果から、日本の現状として、質の高い教育者としての大学教員がより必要となると指摘している。

木原ほか(2007)と坂本・中井(2011)は、長見ほか(2010)や藤田ほか(2011)と同様のソース(リフレクションシートの記述や)を扱っているが、分析の視点としては記述内容の分析、資料の内容分析、フィールドノート、インタビュー調査の内容分析といった、質的アプローチから課題に迫っている。

しかし、木原ほか(2007)においては、養成段階における学生の視点や思考の内実を明らかにすることと

まっており、実際の具体的な記述数の傾向や変容については言及されていない。また、坂本・中井(2011)においては、アメリカのカリキュラム内容の検討とインタビュー調査の知見からまとめているため、その研究における分析者や対象者の思考の偏りが影響した結果である可能性はぬぐい切れない。さらに、その効果のすべてを確認するには至らなかった(坂本・中井, 2011)とあるように、調査対象とした養成プログラムの具体的な効果などについては不明確である。これらの課題について、大谷(2017)は、質的アプローチの一般化可能性は、第三者がその論文の結論に自分を比較しながら解釈することにあると述べている。さらに、質的アプローチにおいては得られた結論そのもの一般性があるのではなく、その結論を読んだ論文の読者が、自身の抱えている課題とその結論とを比較し、翻訳することでその結論を自己の課題に適用することが可能となり、一般化が実現されると述べられている(大谷, 2019)。この点において、質的アプローチは、量的アプローチとその結論の解釈の仕方が、一般化という過程において異なっていることがうかがえる。

4.2.3. 混合アプローチの特徴と課題

最後に、混合アプローチによる先行研究について概観する。

木山ほか(2014)は、大学生が実施する模擬授業について、学生による授業評価及びリフレクションシートの自由記述の内容から、学生の省察する力と授業づくりへの意識について考察している。研究方法としては、量的指標である生徒役の学生が回答する授業評価アンケートと、期間記録法を用いた授業の観察記録を用いると同時に、質的指標であるリフレクションシートの自由記述を用いて得られたデータをもとに検討している。結果としては、①模擬授業の継続的な取り組みがよい授業づくりへの有意義な学習につながっていること、②授業成果に大きな影響を及ぼすとされる教師行動の相互作用の《フィードバック》について、今後の改善を必要とすること、③分析対象となった模擬授業においてはマネジメント場面が少なく、運動学習場面の時間を確保できていたこと、④分析対象とした模擬授業は、学生がこれまでに学習したものの集大成とされる部分にあたることを踏まえて、教師行動や学習内容に関する自由記述が多く見られたことを報告している。これらの成果から、対象者が模擬授業の振り返り学習の積み重ねと、その省察の過程が有効となっていることを示しているとし、教師行動から学習内容へと広がっているものと推察している(木山ほか, 2014)。

他方、村井(2012)は、小学校教員養成カリキュラ

ムを事例的に取り上げ、それを構成する体育科に関する科目間、及び教育実習科目間の関連性及び科目の順序性に関する基礎資料を得ることを目的として報告している。研究方法は、質的指標として対象大学におけるカリキュラムの体育科に関する科目と教育実習科目の実施状況について、各科目のシラバス及び履修便覧の内容について検討している。また、量的指標として、学生に対する質問紙調査から対象カリキュラムの教育実習における活動状況を調査している。その結果として、①教科に関する科目、教育実習科目及び各教科の指導法の3つの授業を架橋するために各授業の関連性を検討する必要性を提起するとともに、②教育実習における活動状況の調査から、教育実習生全員に体育授業を実施する経験を保障することが困難であるため、授業実践の経験は、大学における授業で保障していく必要性を述べている。

混合アプローチを用いた研究方法はMMR（クレスウェルら、2010；抱井、2015）と呼称され、研究結果を深化・拡張することに有効であり、近年注目されている手法である（抱井、2015）。上述した2つの先行研究においてもそれが採用されており、研究課題についてより深く検討する手法を取っている。ただし、木山ほか（2014）は、質的・量的両面から課題に迫っているが、結論づける際に双方を混合するのではなく、量的指標である授業評価アンケート及び授業の観察記録、質的指標であるリフレクションシートの自由記述からの考察を独立させて論じていることがうかがえる。村井（2012）も同様で、シラバスの内容分析とアンケート調査から考えられる内容を、それぞれの調査方法から個別に述べている。このことから、MMRの利点を最大限に活かすためには、得られたデータを併せていかに解釈を行い、その知見を深めていくかが必要であると考えられる。

5. 総合考察

以上、各研究アプローチにおける先行研究を概観し、その課題について検討してきた。

まず、質的アプローチと量的アプローチによる研究は体育教師教育研究の両翼を担っており、そこから得られる成果と課題は相対するものであることが示唆された。さらに、その両者の欠点を埋め、長所を生かす混合アプローチによる研究については、データの解釈の仕方について再確認する必要性がうかがえた。

先にも述べたとおり、混合アプローチを採用させて研究課題に迫る手法が、MMRとして認知されはじめ、その有用性から近年注目されている。しかし、その新

規性と独自性から、その意義と手続きについて熟知したうえで採用させなければ、日本の体育教師教育研究の現状のように、その利点を十分に活かすきれない（抱井、2015）。日本における体育教師教育研究の現状と国際的な流れを加味しても、この研究方法を広く確実に採用させることで、さらなる研究成果の深化・発展に大いに寄与すると考えられる。

ただし、質的・量的の2つの要素を統合したMMRにおいては、研究目的や研究課題についても両要素を併せ持ったものにしなければならない点で困難さを持っている（O'Cathain, 2010）。これは、帰納的に仮説を構築する質的研究の性質と、演繹的に仮説を検証する量的研究の立場が混在することに起因しており、適切にMMRを採用するためにはその両者をつなげる目的や研究課題を設定しなければならない。

また、デザインの質について、学術研究において、研究目的や研究課題に沿って、適切なデータの収集・分析・解釈を行わなければならないのは周知の事実である。MMRにおいては、それらの形式によって、様々な研究デザインをとる（Creswell, 2015）。そして、どうデザインするかは、研究の主となるRQを起点に考慮する必要がある。すなわち、量的データを補完するように質的データを用いるか、質的データを補完するように量的データを用いるかによって、デザインの選択とその意味合いが変わってくるのである。そのため、MMRを適切に実行するために、研究目的や研究課題を吟味するとともに、どのデザインをとるかも慎重に選択する必要がある。

以上、日本の体育教師教育研究の現状と課題から、MMRの要点について述べてきた。今日、日本においては教員養成の改革や教員の年齢構造の変化をはじめ、子供の貧困率や教員の多忙化など、日本の教育を取り巻く課題は多様化かつ複雑化しており教師教育研究の深化が求められるであろう。とりわけ、RQと研究目的、および研究方法の一連の流れを明示することに課題が見られる日本の体育教師教育研究において、RQを起点とした研究のデザインを重視するMMRの研究を深化させていくことは、同分野におけるこれらの諸課題に対して、その核心に迫り、日本の体育教師教育研究の深化と拡大に大いに寄与することが考えられる。今後のMMRのさらなる発展と拡大に期待したい。

【引用・参考文献】

- Carrie Li · Juan Wang, Amy Sau-Ching Ha. (2008) The Teacher Development in Physical Education : A Review of the Literature. *Asian Social Science*, 4 (12) : 3-18.
- Chapman, C. F. and Dreber, A. (2003) Introduction. In : Chapman, G. B. and Sonnenberg, F. A. (Eds.) *Decision Making in Health Care : Theory, Psychology, and Applications*. Cambridge University Press.
- Chen, H. T. (1990) *Theory-Driven Evaluations*. SAGE Publications.
- チャールズテッドリー・アッパス・タシャコリ著 土屋敦・八田太一・藤田みさお訳 (2017) 『混合研究法の基礎—社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合—』. 西村書店 : 東京.
- ・中央教育審議会 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm (参照日2019年7月4日).
- Clert, C., Gacitua-Mario, E., & Wodon, Q. (2001) Combining quantitative and qualitative methods for policy research on poverty within a social exclusion framework. In E. Gacitua-Mario & Q. Wodon (Eds.), *Measurement and meaning : Combining quantitative and qualitative methods for the analysis of poverty and social exclusion in Latin America*. The World Bank.
- 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—. *体育科教育学研究*, 27 (1) : 9-30.
- 廣瀬春次 (2012) 混合研究法の現在と未来. *山口医学*, 61 (1・2) : 11-16.
- 岩田昌太郎 (2010) 数字から見る体育科教育の新地平への道標. *学校教育*. 広島大学付属小学校 学校教育研究会 : 広島, 1111 : pp. 12-17.
- Jesse L. Rhoades., Amelia Mays Woods., David Newman Daum., Douglas Ellison., Thomas N. Trendowski. (2016) JTPE : A 30-Year Retrospective of Published Research. *Journal of Teaching in Physical Education*, 35 (1) : 4-15.
- John W. Creswell (2015) *A Concise Introduction to Mixed Methods Research*. SAGE : Thousand Oaks.
- John W. Creswell 著 操華子・森岡崇訳 (2007) 『研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法』. 日本看護協会出版会 : 東京.
- ジョン W. クレスウェル・V.L. プラノクラーク著 大谷順子訳 (2010) 『人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン—』. 北大路書房 : 京都.
- ジョン W. クレスウェル : 抱井尚子訳 (2017) 早わかり混合研究法. ナカニシヤ出版 : 京都.
- 抱井尚子 (2015) 『混合研究法入門—質と量による統合のアート—』. 医学書院 : 東京.
- 木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定 (2007) 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究. *広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 学習開発関連領域*, 56 : 85-91.
- 木山慶子・野田耕・浜上洋平 (2014) 体育教師教育における模擬授業の効果に関する事例研究—二大学で行なう模擬授業の授業評価と授業に対する意識に注目して—. *九州体育・スポーツ学研究*, 29 (1) : 1-8.
- Lincoln, Y. S., & Guba, E. C. (2000) Paradigmatic controversies, contradictions, and emerging confluences. N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.) *Handbook of qualitative research* (2nd ed.) . pp. 163-188. SAGE : Thousand Oaks.
- 松田悠介 (2015) ティーチフォージャパンの学びの仕掛けとは. 上條晴夫編著『教師教育—いま、考えるべき教師の成長等は一』. さくら社 : 東京, pp. 128-133.
- Michel, J. G. and Hambrick, D. C. (2010) Diversification Posture and Top Management Team Characteristics. *The Academy of Management Journal*, 35 (1) : 9-37.
- 村井潤 (2013) 小学校教員養成における体育科関連科目の改善に関する事例研究—協力校実習における体育科授業実習の実施状況を視座として—. *教育学研究論集*, 8 : 43-48.
- 長見真・阿部悟郎・小浜明 (2010) 日本における保健体育科教員養成カリキュラムに関する実態調査. *仙台大学紀要*, 42 (1) : 13-30.
- 新田明美 (2015) 知らないが大変?! 研究する上でやってはいけないこと (禁忌) —第2回目: 「臨床研究7つの御法度」を無視して, 研究計画を立てること—. *社会薬学*, 34 (1) : 49-51.
- O'Cathain, A. (2010) Assessing the quality of mixed methods research : Toward a comprehensive framework. A. Tashakkori & C. Teddlie.

- TheSAGE Handbook of Mixed Methods in Social and Behavioral Research (2nd ed.). pp.531-555. SAGE : Thousand Oaks.
- 岡出美則 (2002) ドイツにみる学校体育カリキュラム改革の動向. スポーツ教育学研究, 22 (1) : 39-48.
- 岡沢祥訓・高橋健夫・大友智 (1988) 体育授業における生徒行動や生徒の授業評価に及ぼす要因の検討－中学校の体育授業のALT－PE分析を通して－. 奈良教育大学紀要人文・社会科学, 37 (1) : 49-59.
- 大谷尚 (2017) 質的研究とは何か. 薬学雑誌, 137 (6) : 653-658.
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方－研究方法論からSCATによる分析まで－. 名古屋大学出版会:愛知.
- 大友智・吉野聡・高橋健夫・岡出美則・深見英一郎・細越淳二 (2002) 米国における質的体育授業研究の「目的」及び「方法」の特徴 - JTPE誌の研究例の分析から -. スポーツ教育学研究, 22 : 93-113.
- 坂本文子・中井隆司 (2011) 良質な体育教員養成カリキュラム開発に向けての検討－ジョージア州立大学保健体育教員養成プログラムを事例に－. 教育実践総合センター研究紀要, 20 : 101-109.
- シーデントップ (1988) 高橋健夫訳. 体育の教授技術. 大修館書店:東京.
- 高橋健夫・鈴木理 (1994) 体育授業における教師行動分析の研究動向－特に相互作用の言語的・非言語的行動を中心に－. 体育の科学, 44 : 217-222.
- Tashakkori, A. & Teddlie, C. (1998) Mixed Methodology : Combining Qualitative and Quantitative Approaches. SAGE : Thousand Oaks.
- 友添秀則 (2015) 学校カリキュラムにおける体育領域の位置と役割. 日本体育科教育学会編, 体育科教育学の現在. 創文企画:東京, pp.11-26.
- 四方田健二・須甲理生・岡出美則 (2015) 英文学術誌掲載論文における体育科教師教育研究の研究方法の動向－2002年 - 2011年の10年間を対象として－. 体育学研究, 60 (1) : 283-301.
- 吉崎静夫 (1987) 授業研究と教師教育 (1) - 教師の知識研究を媒介して -. 教育方法学研究, 13 : 11-17.